上杉本『史記』の原本形態と渡来時期について

―厳島神社旧蔵本の可能性をめぐって―

陳　翀

はじめに

歴博所蔵の南宋慶元年間（一一九五～一二〇〇）刊『史記』（建陽黄善夫刻三家注本、米沢藩旧蔵、一九六六年に国宝指定。以下「上杉本」と称す）は、『史記』研究において貴重な価値を有しているのみならず、東アジア出版史ないし書物装訂史においても、極めて重要な古典籍の原本であることを、すでに拙稿「天下無二の重宝―上杉本『史記』（黄善夫刻三家注本）の価値について―」において指摘した（注1）。

なお、周知の如く、上杉本については、すでに水澤利忠、尾崎康、小澤賢二の諸氏による重厚な研究があり、ながく国内外の学者における上杉本研究の基礎となっていた（注2）。しかしながら、平成二十三年より二十五年までの三年間、筆者が新たに上杉本を調査したところ、上記諸氏の研究に、修正あるいは再検討すべき記述が多数存在していることが分かった。

本稿は、この三年間の調査結果を踏まえ、まず上杉本の原本形態及び改装経緯を明らかにし、その上で該本の渡来時期や原蔵者などの未解決問題について些か検討を加える。さらに、上杉本の原本形態に着目し、従来の東アジア印刷史研究において、必ずしも明らかにされていなかった―線装本は何時から、如何なる経緯を経て東アジア古典籍の主な装訂形式になってきたか―という問題についても、二、三の私見を述べたい。

①　上杉本における度重なる改装とその原貌

まず、尾崎氏が作成した上杉本の基本書誌情報から見てみよう（注3）。

一三〇巻　宋〔紹興〕刊（建安　黄善夫）

改装後補丹表紙（三三×二二・五センチ）、室町後期に南化和尚が行わせ、自ら題簽を書いて「玄／興」の印を捺したものである。それとともに、本文の原料紙（約二四×一五センチ）を大判の和紙に貼布した。さらに一九三〇年ころ、張元済がこの本を撮影した際に褐色の覆表紙を附け、裏打ちさせている。

史記集解序、補史記序、史記索隠序、史記正義論例謚法解、史記目録、三皇本紀（補史記）と続いて、本文に入り、「五帝本紀（隔六格）史記一」と題する。

左右双辺（一九・七センチ×一二・五センチ）、一〇行、行一八字・注文小字双行二三字。版心は線黒口で、ごく稀に双魚尾の上に大小字数が入り、題は略するものもあるが、「史記五帝紀一」のように大小題を含める場合が多く、刻工名はない。

集解序の文末と尾題の間に「建安黄善夫刊／于家塾之敬室」の木記があり、さらに目録の末葉（第一八葉）が補写で、「安成郡彭寅翁／栞于崇道精舎」と元至元二五年彭寅翁刊本のものが書かれているが、百衲本には篆書で「建安黄／氏刻梓」とあり、この

木記はまだ信用できないでいるが、求古楼本によったものと思われる。

欠画は、巻四第一九葉裏五行の注にまず現れるように、「敦」字に及んでいる。中期の坊刻本としては、比較的厳しく行われている。

列伝の第一は、目録は伯夷列伝となっているが、そこで第三にある老子と荘子が本文では首に移されて、老子伯夷列伝第一となっている。

印記は「興学／亭印」「永光／邱青」（朱・墨）「月／舟」（鼎印）「興讓館蔵書」等。

また、いうまでもなくこの本の最大の特徴は、集解・索隠に正義を加えたことで、現存本では当然であるが、おそらく営利上の目的でははじめて行ったものであろう。（以下略）

補写葉が二〇余あるのはともかくとして、巻三一第二葉表第六行がまったく欠落し、逆に巻一二八第二七葉第三・四行がほぼ同文を重複させている。百衲本ではこれらを訂正し、行を送り、字様を似せて補写したりしている。

右記の解題を踏まえ、上杉本の原本形態及び改装経緯を中心に、この度の調査研究によって得られた新しい書誌情報を、以下のように補訂する。なお、本稿が提示した書誌情報を作成するには、第二冊の第一頁表を中心として、各冊にわたる複数の頁の測定を行ったのである。

＊〔黄善夫原本〕全七十冊、「青光」原蔵。左右双辺（約一八×一四・五センチ）。版心は線黒口で双魚尾、巻数及び葉数を記す。また、耳題に略篇名を記す。第一冊（現在の第二冊）の「史記正義序」部分までは半葉九行、行一五字。以後は一〇行、行一八字・注文小字双行二三字。原料紙（約二二・六×一四・五センチ）に、線装の跡と思われる三つの針眼（上紙辺と第一眼との間は約一・〇センチ、第一眼と第二眼との間は約九・九センチ、第二眼と第三眼との間は約九・六センチ、第三眼と下紙辺との間は約二・〇センチ）が残されている。

＊〔第一次改装〕原料紙を裏打ちして補修した。裏打ち用紙は、原料紙よりやや大きなサイズの和紙（約二四・七×一六・六センチ）が使用されていた。補修後の本は、原本と同様に三針眼線装を施したと思われる。但し紙サイズの不揃いが原因であるのか、或いは紙ズレが原因であるのか、一部の紙の旧針眼のすぐ近くに新たな針眼ができた。

＊〔第二次改装〕元刊本目録（四針眼装）を第一冊として補入した（注5）。また、恐らく書き入れ注を施すために、裏打した原料紙をより大判の和紙（約二八・五×二二センチ）に貼付した。散佚した葉については、先ず原料紙と同じサイズの和紙を使用して補写し、さらに大判の和紙に貼付した。改装された一部の巻頭に、「月舟」の鼎印が見える。これによって、今回の改装者は、尾崎氏が指摘したように、書き入れ注を施した月舟寿桂（一四七〇～一五三三）であると思われる（注4）。

＊〔第三次改装〕すべての料紙を大判の和紙（約三二×二二センチ）に貼付した。但し、一部の書き入れ注を施した和紙の空白部分が、改装の際に適当に切りとられていたことが確認できる。現存する表紙に残された旧題簽（旧題簽の下段に「玄／興」印が捺されていた）からみると、今回の改装は、南化玄興（一五三八～一六〇四年）によるものであると推測できる。

＊〔第四次改装〕各冊に新たな丹表紙を付け替え、原本を九十冊に改装した。改装後の本は四針眼線装。改装後の多くの冊は、南化和尚の旧題簽を再利用したが、必要に応じて題簽の下に新たな冊数を書き直した。第一冊の丹表紙に「目録一冊　序一冊　本紀十四冊　年表十一冊　八書九冊　世家十九冊　列傳

三十五冊　合九十冊」という書きつけが見える。改装者と改装時期は不明であるが、松崎慊堂の記述によると、今回の改装は、文政年間に米沢藩学の関係者によるものであると推定できる（注6）。

以上から、上杉本が少なくとも前後四回の大きな改装を経たことが明らかになる。但し、第一・二次の改装時に手を加えていなかった黄善夫本の原料紙を、第三次改装の時に直接的に大判の和紙（約三二×二二センチ）に貼付したものもある。また、上杉本原本の版心と綴じ代の部分を仔細に確認したが、原装が帖装本である『元氏長慶集』（旧金沢文庫本）に見られるような特有の糊跡が見えない。つまり、上杉本の原本が帖装本である可能性はひとまず排除できる。また、後述のように、三眼針線装は、敦煌文献にもみえる早期線装書籍の装幀法の一つである。これによって、現存の上杉本の原料紙にみえる三針眼の跡は、当本が渡来した際の原装の跡である可能性が、極めて高いと思われる（注7）。

②　上杉本の渡来時期と厳島神社伝来本の可能性

上杉本がいつ、誰によって日本に将来されたのか。この問題について、かつて水澤氏が、上杉本に捺されていた朱墨印に注目し、次のように指摘している（注8）。

然るに本書は、室町期から更に遡って少なくとも鎌倉期に既に本邦に将来されていたものと思われるふしがある。本書に屢々見える「水光卯青」（朱印及墨印）は宮内庁書陵部所蔵史記集解旧鈔巻子本（范睢蔡澤列傳第十九）にも二ヶ所見られる。この墨印は何れも該巻子本の紙の貼り合せ目に捺印せられ、又上杉氏所蔵慶元本同巻（列傳第十九）巻首にも同墨印が見られる。之はかつて両書が同一所蔵者に帰属せることを示し。且つその時期は該巻子本の書写の前後の頃、（紙の継ぎ目毎に捺印してあると云うことは、最初の装幀の頃のものと思われるから）と推定出来る。この事は又本書と古鈔本の関係の浅からざるを示すものであるといえよう。該巻子本に就いては、審其書體、殆鎌倉初期所寫（図書寮善本書目解説）とあるによれば、慶元本も亦鎌倉の初期既に将来せられていたことを知るであろう。

但し、水澤氏は上杉本と書陵部蔵鎌倉初期旧鈔本史記との関係を指摘したものの、その原蔵者に関する更なる情報は提示していなかった。改めて調べてみたが、残念ながら、氏が指摘した「水光卯青」という人物に関する記録はどこにも見当たらなかった。あるいはこれが原因で、後に尾崎氏はこの印文を「永光邱青」と、小澤氏は「水光邱（卯）青」と考え直したのであろう。しかしながら、「永光邱青」にせよ、「水光邱青」にせよ、やはり古文献から該当する人物の存在を確認することはできなかったのである。

かかる印文解読問題を解明するため、筆者はまず、該当印鑑の模写と模刻を繰り返した。これらの作業によって、印文にみえる四つの文字は、水澤氏が最初に判読したように、「水」「光」「卯」「青」の四文字であることがほぼ確定できた。続いて、印文の読み順を変えて読んでみたところ、該当印文が「水卯青光」と解読できることがわかった（注9）。このような文字の並べ順は、正しく欄眉に捺されている「青光」という印文の並び順とも合致する。

さて、この印に刻まれた文字は、果たして従来指摘されるように、単なる所蔵者の名前を示すものであるのか。まず「水卯」という言葉の意味を調べてみたところ、この言葉は、仏教文献にみえる癸卯年の雅語であることが明らかになった。例えば、大正新脩大蔵経第十二冊に収録された『大雲無想経巻九』の巻末跋語に、「清信女張宣愛所供養經　歳在水卯正月十一日寫訖」という用例が見える。また、かつて

筆者が指摘したように、欄眉の「青光」という印は、「眺」（正視した）という一字印とも読める（注10）。以上のことを踏まえれば、「水卯青光」という印文は、「癸卯年青光拝読」と解釈できるであろう。

このように、難しい紀年の雅語を用いたり、または巧みに文字を組み合わせて新しい意味を生み出したりしていることなどから、この上杉本の原蔵者は、かなりの高い文化的教養を有していることも推測できる。黄善夫本史記のような高価な宋刊本を所持できることを踏まえて考えれば、この「青光」は、あるいは鎌倉初期の某大寺社の権力者であることを、ある程度想定できるであろう。

そこでさらに調査を進めてみた。まず、鎌倉初期の癸卯年に当たる年は一二四三年（南宋淳祐三年・日本寛元元年）であることが分かった。これを手掛かりして、仁治・寛元年前後の寺社関連の古文書を探してみたところ、『鎌倉遺文』に、次のような一通の「安藝嚴島社一切經會請定」（安芸野坂文書・補一二八二）と題する古文書が見つかったのである（注11）。

（端裏書）「供僧中へ觸狀」

請定

來十四日恒例一切經會灌用僧事

座主　學頭「奉」　惠鏡房　禪修房「奉」

筑後公「奉」　丹後公「奉」　惠觀房阿闍梨「奉」　青光房「奉」

但馬公「奉」　增蓮房「奉」　相勝房「奉」　惠聖房「奉」

刑部公「奉」　越前公「奉」　浄行房「奉」　禪智房「奉」

修月房「奉」　隨園房「奉」　教明房「奉」　浄妙房「奉」

法如房「奉」　河内公「奉」　越中公「奉」　筑前公「奉」

理乗房「奉」　觀禪房「奉」　覺法房「奉」　慈法房「奉」

明禪房「奉」

右、任例請定如件、

仁治二年九月十一日

言うまでも無く、厳島神社の一切経会は、厳島神社の最も重要な法事である。青光房がこの一切経会請定の名簿に名前を連ねることから、彼は当時の厳島神社の中心的人物の一人であることがほぼ断定できる。厳島神社は、平清盛時代からすでに宋王朝と深く交流しており（注12）、刊刻されたばかりの黄善夫本が、一足はやく厳島神社に所蔵されたのも不思議ではない。もし、この厳島神社の青光房が、上杉本にみえる「青光」と同一人物であるとしたら、上杉本は、寛元元年以前すでに厳島神社に渡来していたことが推測できる。つまり、以上の考証から、黄善夫本史記は、少なくとも刊行の二・三十年後、すでに海を渡って厳島神社に所蔵されていた可能性が、新たに浮上してくるのである。

③ 線装本起源時期の通説における疑問点

上記のように、南宋の慶元年間に、建陽黄善夫によって刊行された三家注『史記』は、海を渡って日本に将来された後、幾度の改装を経たが、その原装である三針眼装の旧様は今でも窺える。

しかしながら、先行研究において、針眼に関する記述は殆ど見当たらない。また、小澤氏が、上杉本の原装は、「帖装本の宋版」という見解を示している（注13）。如何なる理由があって、諸氏は明白に見えたはずの針眼に敢えて触れなかったのか。機会があって小澤氏に尋ねたところ、これは主に中国出版史および書籍装訂史の定説に鑑みた判断であるという答えを頂いた。

周知の如く、線装本は、近世の東アジアにおける最も重要な書籍装訂形式の一種であり、また、古典籍装訂の最終形態とも言われてきた。但し、その起源について、明白な記載が存在しないゆえ、現在一般に、「大体明朝の中頃に形成され、清朝になってさらによく流行し、現在までずっと使われている。線装の装訂法は、基本的には包背装と同じだが、違っている点は、がっちりとした書衣で後背を包まず、本の前

と後におのおの表紙をつけ、その後で孔をあけ、糸を通して冊子とする点である」と推定されている（注14）、また日本では古来線装法を「袋綴」とも称し、「二つ折りした料紙の右側綴じ目の方から見て、袋状になっているからの呼称。この綴じ方はシナで明代に起こり、明朝綴と言われ、わが国へも影響を及ぼしたもので、江戸初期、松永貞徳の文集などにも『唐綴』と称している」と解釈されている（注15）。

書誌学の通説によれば、線装本は主に中国の明朝中頃、つまり十五世紀中葉にはじめて生まれた装訂法である。それ以前の宋元時代の書籍は、糸で綴じる線装ではなく、一般に糊で貼り合わせる「帖装本」という装訂法が使用されていたと思われている。ちなみに、従来の研究において、宋元時代の「帖装」に関しても様々な見解があるが（注16）、概ね「胡蝶装」と「包背装」との二つの装訂法に分別できるであろう。「胡蝶装」については、長澤規矩也氏の『古書のはなし―書誌学入門―』に、次のように解説が窺える。

> 胡蝶装は、シナでは、宋代装訂法の代表的なものといってよいが、何分にも遠い昔のことであるし、当時のまま伝わっているものは、ほとんどないといってよろしい。胡蝶装本の常として、表紙は厚手の用紙又は裏張りを加えたものが多い。そこで、当時、書物は**下小口**―書物の下方の紙の切り口―を手前に、背を上方にして、架上に立てた場合が多かったのではないかという推定が、北平図書館旧蔵（臺灣故宮博物館現存）の宋刊本冊府元亀などの**小口書き**―下小口に書かれた、見出し用の書名―が、背の方から、左小口に向けて施されているので想像される。
> 胡蝶装の原形では、裏面には文字が書かれないので、初めからあけていくと、字面、白紙の裏面と交互になる。そして、後世の和本のように、折り目が外へ出ず、表紙の背の内面にくるので、折り目に見出し用に書名を略記しても全く無意味となるので、大相撲の番付の西方の張り出しの位置に、篇名の略称が刻入される。
> この部分を**耳格**（略して耳）という。

また、「包背装」の装訂形式について、氏は、引き続き次のように述べている。

> かくて、字面を逆に外表にして紙を重ね、右方の余白部分をかんぜよりなどで二か所とじ、その上から、本文用紙一枚強い厚手の紙を使って、本文の折り目と反対の方から表紙でくるむ。背と背に近い部分はのり付けにするのである。この装訂を、漢語で**包背装**、和語では**包み表紙**又は**くるみ表紙**とよぶ。

但し、先述のように、このような線装本起源時期に関する通説は、あくまで推測の域を出ない。このことについて、早くも長澤氏は、同書において、「線装本はいつから始まったかとなると、明確ではない。というのは、今日の伝本は改装本が大部分であるし、ことに、宋元のままの装訂はほとんどないから、伝本では判断しかねるためである」と、疑義を呈していたのである（注17）。

さらに、近年の新たな研究によって、現存する敦煌遺品の中に、多くの線装典籍が存在していることが明らかとなり、しかも『金般若波羅蜜多經』（Or. 8210/S. 5646）などのように、三眼線装の形で装幀されている実物の存在も確認できる（注18）。また、中国の寧夏省賀蘭県拝寺溝方塔の発掘においても、西夏時代（一〇三八～一二二七）の線装古籍が複数発見された（注19）。上杉本のことと合わせて考えると、宋元時代において、線装という装訂法がすでに仏典や経史などの書籍を含めて、広範囲に使用されていたことが確認できるのである。つまり、通説に従って上杉本の原本が線装本であることを否定するのではなく、逆に上杉本を出発点とし、「宋本＝帖装本」という通説が、果たして本当に正しいのかを、宋代の古文献を含めて、もう一度考え直す必要があるであろう。

④ 北宋時代における「縫繢装」（線装）の濫觴

確かに、宋元時代の文献において、「線装」という言葉は見当たらない。これも、宋元時代において線装という装訂形式が成立されていなかったという見解の主な根拠の一つである。しかし、宋代の文献に、「縫繢」という言葉は屢々使われている。「縫繢」というのは、糸で綴じるという意味であり、正しく明代以後に使われる「線装」の類語である。しかも、これらの文献からみると、むしろ「縫繢装」という書籍装訂形式は、宋元時代の書籍の一般的な装訂法であることが窺える。

例えば、北宋初期の重臣の王欽臣が撰した『王氏談録』に、自分の父親で、蔵書家としても有名な王洙を巡る逸話に、次のような一文が窺える（注20）。

公言、「作書冊、黏葉為上。雖歳久脱爛、苟不逸去。尋其葉第、足可抄録次序。初得董子繁露數卷、錯亂顛倒、伏讀歳餘、尋繹綴次、方稍完服、乃縫綴之弊也。嘗與宋宣獻談之、公悉命其家所録書作黏法。」

右の逸話は宋代において広く伝わっていたようである。該当記事は、南宋初期の有名な民間蔵書家の張邦基が撰した『墨荘漫録』にも転載されている。また、現存する『王氏談録』が後世の集佚本のため、『墨荘漫録』の記事によって、その原文後半部分が脱落していたことも分かる。以下、張邦基の記事を踏まえて少し検討を加える（注21）。

王洙原叔内翰嘗云、「作書冊、粘葉為上。久脱爛、苟不逸去、尋其次第、足可抄録。屢得逸書、以此獲全。若縫繢、歳久斷絶、即難次序。初得董氏繁露數冊、錯亂顛倒、伏讀歳餘、尋繹綴次、方稍完復、乃縫繢之弊也。嘗與宋宣獻談之、宋悉令家所録者作粘法。予嘗見舊三館黄本書及白本書、皆作粘葉、上下欄界出於紙葉。後在高郵、借孫莘老家書、亦如此法。又見錢穆父所畜亦如是、多只用白紙作標、硬黄紙作狹簽子。蓋前輩多用此法。予性喜傳書、他日得奇書、不復作縫繢也」。

【翰林学士の王洙（字原叔）がかつてこう言った、「書籍を作る時、粘葉装は最も上等である。たとえ時間が経って書葉が破れたり、脱葉したりしても、その順番を確認すれば、また補写することができる。私は屢々逸書を得たが、みな粘葉装であったおかげで書物の補完ができた。しかし、もし糸で綴じれば（縫繢）、年月が経つと糸が切れてしまい、元来の順序を復原し難しくなる。むかし董仲舒の『春秋繁露』数冊を得たが、頁がバラバラになって全く順序が分からない。一年余りの時間を使ってその文章の中身を確認し、前後の順序を整理し、ようやくおおよそにその本の原型に近づくことができた。これこそ、線装の悪いところであろう。かつて宋宣献にこの故事を話した。宋宣献はすぐ家蔵本を全部粘葉装に改装するように命じた。私はかつて三館（昭文館・集賢院・史館）の黄本書及び白本書を拝見したが、全部粘葉装であり、上下の欄界は外側に向かっていた。のちに高郵に滞在した時に、孫莘老家の蔵書を借りたが、やはり帖装であった。銭穆父家の蔵書もそうである。多くは白紙を使って巻標とし、堅い黄紙を細い簽子とする。蓋し先輩たちはみなこのような装訂法を用いている。私は生まれながらにして蔵書や抄書を愛好しているので、今後もし珍しい書物を入手できれば、二度と線装はしないだろう」と。】

右文によって、宋初の王洙の時代において、帖装と線装（縫繢）という二つの装訂形式が併用されていたことが窺える。確かに帖装は最も上等な装訂形式であるゆえ、宋代の最高学術機関である三館（昭文館・集賢院・史館）の蔵書に採用されていた。また、孫覚（一〇二八

～一〇九〇、字莘老）や銭勰（一〇三四～一〇九七、字穆父）などの高官らの蔵書にも採用された。しかしながら、これはあくまで主要官庁及び数少ない高級官僚に限られる（注22）。例えば、北宋期に最も有名な蔵書家である宋綬（九九一～一〇四〇、字公垂、また宣献。趙州平棘〔今河北趙県〕人、宋敏求の父）でさえ、王洙の教えがなければこのような装訂法があることすら知らなかったという。また、王洙の「今後もし珍しい書物を入手できれば、二度と線装はしないだろう」という発言から見ても、やはり彼が所蔵している多くの「奇書」以外の書籍は、「縫繢」、つまり線装形式が用いられていたことが看て取れる。

さて、上記の王洙の語録によれば、帖装は、数多くの装訂法のうち、一番上等な方法であった。しかしながら、如何なる理由があってこのような上等な装訂法が、宋代の最高学術機関の三館及び一部の高級官僚の蔵書にしか採用されなかったのか。これについて幾つかの理由があると考えられる。まず、北宋時代においては民間の出版事業がまだ発達していなかったため、購入できる刊本は、概ね国子監などの国家機構が印刷したものに限られていた。購入の方法は、概ね以下の二つがある。一つは製本済みの成本を買う。もう一つは、紙墨代を払って、自分が紙を持って印刷しに行く。その場合、もし官庁に装訂を依頼すれば、紙墨代以外の装訂代が新たに発生する。このことについては、葉徳輝の『書林清話』に詳細な考証がある。宋刊本の紙墨代と装訂代に関する葉徳輝の記述を整理すると、以下の通りである（注23）。

＊『漢雋』（二冊）紙墨代〔一百文〕・粘葉装代〔一百六十文〕
＊『大易粹言』（二十冊）紙墨代〔一貫二百文〕・粘葉装代〔一貫五百文〕
＊『会稽志』（二十巻）紙墨代〔八百文〕・粘葉装代〔闕字のため不明〕
＊『續世説』（二十巻六冊）紙墨代〔二百四文〕・粘葉装代〔二百八十一文〕
＊『二俊文集』（四冊）紙墨代〔三百七十二百文〕・粘葉装代〔闕字のため不明〕
＊『小畜集』（三十巻八冊）紙墨代〔五百文〕・粘葉装代〔四百三十文〕

右記した書籍の印刷経費をみると、『漢雋』や『大易粹言』などの本のように、帖装の装訂を依頼する場合、本の印刷代より高い。そのため、多くの人は、恐らく王洙と同じように、一般の蔵書については、高価な帖装より、殆どお金の掛からない線装（縫繢）の方を選んだのであろう。

しかも、帖装にするのはかなりの専門技術と時間が要る。これは、国子監や三館などの学術機関に「装潢手」と呼ばれている装訂専門の技師が配置されているからこそできるものであろう。また、技術はともかく、実は使われている糊も、相当特殊かつ高価なものであると思われる。これについて、明代文人の張萱の『疑耀』に、次のような記事が窺える（注24）。

今祕閣中所藏宋板諸書、皆如今制鄉會進呈試録、謂之胡蝶装。其糊經數百年不脱落、不知其糊法何似。偶閲王古心筆録、有老僧永光相遇、古心問僧、前代藏經、接縫如線、日久不脱、何也。光云、古法用楮樹汁・飛麪・白芨末三物調和、如糊以之粘紙、永不脱落、堅如膠漆。宋世装書、豈即此法耶。

【祕閣に現蔵している宋版の諸書籍は、全部現在の郷試や會試などの科挙試験に進呈した試録のようなものである。これを胡蝶装という。その糊は、数百年を経ても剥離しない。糊の配合方法が如何なるものであるのかはわからない。偶々王古心の『筆録』を読み、老僧の永光と相遇し、古心は、前代の蔵経は、貼り付けのところは糸で綴じたように、日にちが経っても剥離しないが、一

体なぜだろうと、僧に聞いた。光が、古法は楮樹汁・飛麪・白芨末の三物を用いて調和し、もしこれを紙の接着に使えば、永遠に剥離しない。牢固さは漆に比肩できると答えた。宋の時代の装訂に使うものは、正しくこの方法で作った糊であろうか。】

つまり、一般の糊であれば、例え帖装にしたとしても、手間や時間を費やしたわりに、永久脱落しないという効果はあまり得られないのである。そのため、宋代において、帖装は高級装訂法として推挙されながらも、より多くの書籍は、やはり上杉本のように、糸で綴じるという簡単かつ実用の仮綴じ法が採用されていたのであろう。

むすびにかえて

最後に、上杉本にみえる「耳題」のことについて些か考証を加えたい。実は、先行研究において、上杉本の原本をはじめとする宋刊本の一般的な装訂法が、あくまで帖装本であるという認識に至ったのは、もう一つの重要な理由があった（注25）。これについて、山本信吉氏は、次のように書き記している。

粘葉装本が中国の装幀法であることは、空海将來の『三十帖策子（冊子）』が粘葉装本であったこと、またフランス国立図書館にあるペリオ将來の敦煌本『白氏文集』（一帖・番号二四九二号）が粘葉装であることによって明らかである。ただ、付言すれば、この粘葉装本は北宋時代の宋版策子（冊子）本の装幀法でもあった。今日現存する宋版の漢籍などの策子本はいずれも南宋時代の印刷で、袋綴装であるが、北宋時代の装幀は印刷した料紙の文字面を内側にして二つ折りにし、折目の外側に糊を付けて貼り合わせたもので、見開きの本文面と糊付けの白紙とが交互になる。つまり二枚あけては文字を読み、また二枚あけては文字を読む仕立てであった。その証拠が「耳題（耳格）」と版心の存在である。

「耳題」とは印刷された本文を取り囲む匡廓の左右の肩の部分に耳のように張り出した形で記された略題もしくは篇名のことで、本文の篇・章の検索の便宜を計った、今日でいう柱のことである。この「耳題」が綴目側にあって見出してとしては何の役にも立っていないが、これが粘葉装ならば立派に見出しとして役に立っている。書名、巻数、丁数、刻工名を記した版心も同じことで、袋綴装では折目の外側にかかって見苦しいが、粘葉装ならば折目の内側にあって一目瞭然である（余談ながらこの「耳題」の話は故神田喜一郎博士の御自慢の話で、上杉家本『慶元版史記・漢書・後漢書』の調査のさいに、親しくお教えを受けたのを懐かしく憶い出す）。

このような「耳題は見出しである」という推測は、一見して筋が通っているようであるが、しかしながら、現存している刊本からみると、「耳題」は、必ずしも「見出し」のために附したとは限らないことがわかる。ちなみに、和刻本においても、「耳題」を綴り代側に置き、検索の機能を全く有しない装訂形式も存在している。例えば、江戸時期の八文字屋が刊行した浮世草子類書の多くは耳題が装訂後に綴じられていたことになる。京都大学附属図書館所蔵『浮世親仁形気』は、正しくこのような装訂形式が行われた原物の一つである（注26）。

以上のことを総合的に見れば、宋版本の耳題は、読者のためにつけたものというより、むしろ装訂者のための目印であると考えた方が合理的であろう。少なくとも、「耳題」の存在は、上杉本の原本が三針眼線装本であることを直接否定する材料にはならない。

注

（1）『歴博（特集　古典籍再発見）』第一七八号、二〇一三年五月。

（2）水澤利忠「上杉家藏慶元本史記の研究」（『米澤善本の研究と解

題：附　興讓館舊藏和漢書目録』、市立米澤圖書館、一九五八年）。尾崎康「宋紹興黄善夫刊本（南宋中期建刊本）」（同氏『正史宋元版の研究』所収、汲古書院、一九八九年）、「黄善夫本史記について」（『史記（十二）』、汲古書院、一九九八年）。小澤賢二「南化本『史記』解説」（『史記（十二）』）。

（3）前掲の尾崎康「宋紹興黄善夫刊本（南宋中期建刊本）」を参照。

（4）前掲の尾崎康「黄善夫本史記について」を参照。

（5）現存上杉本第一冊の『目録』については、従来末葉（第一八葉）のみが月舟による江西彭寅翁崇道精舍本に基づく抄補と見なされていたが、目録に記される老荘列伝の配列順序と本文のそれとが一致しないことから推測するに、目録全体が後人による補入であったと考えられる。これについて、拙稿「上杉本『史記』について」（『東アジアをむすぶ漢籍文化―敦煌から正倉院、そして金沢文庫へ　予稿集』所収、二〇一二年）を参照。また、この問題についての更なる考証は、別稿に譲りたい。なお、数値からみると、尾崎氏が提示した書誌情報は、『目録』に基づき作成したものであると考えられる。

（6）松崎慊堂『慊堂日歴』（濱野知三郎編、共同印刷株式会社、一九三二年再版本）文政十年十二月十五日条に、「宋板左國史漢　達助曰、達米澤人米澤學校所蔵、云其表紙以好朱厚貼之、人之借者、磨其朱自取、故今不出學校云。然余曾見史記於贄川兄處、不貼朱也」とある。よって、現存する上杉本史記の丹表紙は、松崎慊堂が大島贄川の所に上杉本を見た後に付き加えたものであることがわかる。なお、本条に対して、山田琢訳注『慊堂日暦2』（平凡社、一九七二年）に、「〇宋板左国史漢　達助（米沢の人）曰く、米沢学校所蔵。云う、その表紙は好朱を以て厚くこれを貼す。人の借る者、その朱を磨して自ら取る。故に今は学校より出ださずという。然れども余はかつて史記を贄川兄の処にて見たり、朱を貼せざるなり」と訳している。

（7）本書の日本渡来時期は不明である。但し、前掲の水澤利忠「上杉家藏慶元本史記の研究」に指摘されているように、本書に見える「青光」印は、書陵部蔵鎌倉初期旧鈔本史記の紙背にも捺されていた。後述のように、このことを踏まえて考えると、本書は、少なくとも鎌倉初期にすでに伝来したことがわかる。また、書陵部蔵鎌倉初期旧鈔本史記の書誌情報について、『図書寮典籍解題漢籍篇』（宮内庁書陵部、一九六〇年）に、次のような記述が窺える。

史記范睢蔡澤列傳　一軸　鎌倉時代写　五一二・九三

巻子本。裴駰の集解。巻高三十糎、界高二十四糎。行間有界。毎行十四字乃至十六字不等。注文雙行、毎行二十一字乃至二十三字不等。行間及び欄外に、孔衍の春秋後語、及び盧蔵用の注、劉伯荘の史記音義、鄒誕生の史記音等の古書の佚文が可成り書き込まれており、第二十四紙と第二十五紙との接縫及び第二十九紙と第三十紙との接縫に「水光卯青」の墨印がある。これと同種の墨印は、上杉家蔵の南宋黄善夫刊史記の各所にある所から見て、この両書はもと同一人の所有するものであり、且つ鈔本には黄善夫本と対校して、其の出入異同が朱書されている。又、紙背には黄善夫本より多くの正義・索隠の注が転写されている。史記の古鈔本として貴重なもので、印本とは文字の異同が可成りある。ヲコト点もある。

なお、今回の調査を通じて、「水光卯青」という印鑑が、第九十冊（巻一百三十「太史公自序」）第一頁表のように、直接に針眼の上に押されていたケースの存在も確認できたのである。よって、原紙にみえる三眼針の跡は、少なくとも「青光」に所蔵される前のものであることが推定できる。

（8）前掲の水澤利忠「上杉家藏慶元本史記の研究」を参照。

（9）ＡＢＣＤのような四字印の場合、一般に「ＡＢＣＤ」順で文字を並べるが、「ＡＣＤＢ」の順で文字を組み合わせることも可能である。

(10) 前掲の拙稿「上杉本『史記』について」を参照。
(11) 竹内理三編『鎌倉遺文　古文書編　補遺第三巻』、東京堂出版、一九九五年。
(12) これについては、拙文「平清盛の開国と『太平御覧』の渡来」（『厳島研究』第9号、二〇一三年）を参照。但し、当文は第12頁下段に一部の誤記が存する。お詫びして以下に訂正する。「○（誤）③延久五年→（正）＊【延久五年…】　○（誤）入宋した重源と成尋によって→（正）入宋した重源によって」
(13) 前掲小澤「南化本『史記』解説」を参照。
(14) 魏隠儒・王金雨著『漢籍版本のてびき』（波多野太郎・矢嶋美都子訳、東方書店、一九八七年）第四章「漢籍版本の用語」を参照。
(15) 川瀬一馬著『日本書誌学用語辞典』（雄松堂出版、一九八二年）を参照。
(16) 「粘葉装」のことについては、田中敬『粘葉考』（厳松堂書店古典部、一九三二年）を参照。
(17) 長澤規矩也『古書のはなし―書誌学入門―』（冨山房、一九七九年）「二　装訂の話」を参照。
(18) これについては、以下の論文を参照されたい。(1) 李致忠『敦煌遺書中的装幀形式與書史研究中的装幀形制』（『文献』二〇〇四年第二期）。(2) 邵国秀『関於敦煌文献中幾種装幀形式的研究』（『図書情報』二〇〇四年第五期）。(3) 李致忠『中国古代書籍的装幀形式與形制』（『文献』二〇〇八年第三期）。
(19) このことについては、牛達生「方塔出土写本縫繢装両例」（『中国印刷』二〇〇五年第二期）、「従拝塔寺方塔出土西夏文献看古籍中的縫繢装」（『文献』、二〇〇年第二期）を参照。
(20) 宋・王欽臣撰『王氏談録』（文淵閣四庫全書影印本）を参照。
(21) 孔凡禮校点『墨莊漫録』（唐宋史料筆記叢刊、中華書局、二〇〇二年）を参照。なお、孔凡禮校点本の一部に断句の誤りが見られたので、ここで修正した。
(22) 「胡蝶装」などの帖装には、特殊な厚手の紙が必要とされる。そのため、一般の人には不向きであると考えられる。また、内府蔵書が帖装にしたのは、閲覧よりも、虫喰い防止などの保存を考慮したものであると思われる。これについて、明末清初の文人姜紹書が撰した『韻石齋筆談』（知不足齋本）巻上「秘閣藏書」条に、「内府秘閣所藏書、甚寥寥然。宋人諸集十九皆宋板也。書皆倒摺、四周外向、故雖遭蟲鼠嚙而未損。但文淵閣制既庫狹、而牖復暗黑、抽閲者必秉炬以登。内閣輔臣、無暇留心。及此而翰苑諸君、世所稱讀中秘書者、曾未得窺。東觀之藏、至李自成入都付之一炬、良可歎也。楊文貞士奇有文淵閣書目十四卷、此乃永樂至宣德間所裒。後漸散逸、不能如舊數矣」という論述が窺える。また、前掲田中敬『粘葉考』に掲載された現存する中国胡蝶装古典籍は、何れも内府本である。
(23) 清・葉徳輝『書林清話』（世界書局、一九七〇年）巻六「宋監本書許人自印並定價出售」条に、「宋時國子監板、例許士人納紙墨錢自印。凡官刻書、亦有定價出售。今北宋本『説文解字』後、有「雍熙三年中書門下牒徐鉉等新校定説文解字」、牒文有「其書宜付史館、仍令國子監雕為印板、依九經書例、許人納紙墨錢收贖」等語。南宋刻林鉞『漢雋』、有淳熙十年楊王休記後云、「象山縣學『漢雋』、每部二冊、見賣錢六百文足、印造用紙一百六十幅、碧紙二幅、賃板錢一百文足、工墨裝背錢一百六十文足。」又題云、「善本鋟木、儲之縣庠、且藉工墨盈餘為養士之助。」見『天祿琳瑯後編』四。淳熙三年舒州公使庫刻本州軍州兼管内勸農營田屯田事曾種『大易粹言』牒文云、「今具『大易粹言』壹部、計貳拾冊、合用紙數印造工墨錢下項、紙副耗共壹仟叁百張、裝背饒青紙叁拾張、背青白紙叁拾張、樧墨糊藥印背匠工食等錢共壹貫伍百文足、賃板錢壹貫貳百文足。本庫印造見成出賣、每部價錢捌貫文足。右具如前。淳熙三年正月日雕造所貼司胡至和具。」此牒在本書前。

吾曾見宋刻原本、今『天祿琳瑯後編』二載壹貳叁等字、均作一二三。不知牒文原式數目字借用筆畫多者、乃防胥吏添改。若作省寫、失其意矣。明仿宋施宿等『會稽誌』、後有記云、「紹興府今刊『會稽誌』一部、二十卷。用印書紙八百幅、古經紙一十幅、副葉紙二十幅、背古經紙平表一十幅、工墨錢八百文、每冊裝背□□文。右具如前。嘉泰二年五月日手分俞澄、王思忠具。」此書見『陸誌』。其數目字省寫、或由傳刻改之、或鈔手省寫所致、未可知也。又舊鈔本宋孔平仲『續世說』十二卷、前有記二則。其一云、「沅州公使庫重修整雕補到『續世說』壹部、壹拾貳卷、壹伯伍拾捌板、用紙叁百壹拾陸張。右具如前。」其一云、「今具印造『續世說』一部、計六冊、合用工食等錢如後、一印造紙墨工食錢、共五百三十四文足。大紙一百六十五張、計錢三十文足。工墨錢、計二百四文足。一標褙青紙物料工食錢、共二百八十一文足、大青白紙共九張、計錢六十六文足。麵蠟工錢、計二百一十五文足。以上共用錢八百一十五文足、右具在前。」又有紹興二十七年三月日校勘題名、見『陸誌』。後一則數目用本字、或亦傳鈔所省也。明正德己卯重刻宋慶元元年二月刊『二俊文集』、前有記云、「『二俊文集』一部、共四冊。印書紙共一百三十六張、書皮表背並副葉共大小二十張、工墨錢一百八十文、賃板錢一百八十六文、裝背工糊錢、按、此下有脫文。右具如前。二月日印匠諸成等具。「明影宋紹興十七年刻王黃州『小畜集』三十卷、前記一則云、「黃州契勘諸路州軍、間有印書籍去處。竊見王黃州『小畜集』、文章典雅、有益後學、所在未曾開板。今得舊本、計壹拾陸萬叁仟捌百肆拾捌字。檢准紹興令諸私雕印文書、先納所屬申轉運司選官詳定、有益學者聽印行。除依上條申明施行。今具雕造『小畜集』一部、共捌冊、計肆佰叁拾貳版。合用紙墨工價下項印書紙並副板肆佰肆拾捌張、表背碧青紙壹拾壹張、大紙捌張、共錢貳佰陸拾文足。賃板樧墨錢伍百文足、裝印工食錢肆佰叁拾文足、除印書紙外共計壹貫壹佰叁拾陸文足。見成出賣、每部價錢伍貫文省。右具如前。紹興十七年七月日。」『孫記』舊影寫本有此書、數目字均用本字、文亦未全。以上諸書牒記、並載『陸誌』、可見宋時刻印工價之廉、而士大夫便益學者之心、信非俗吏所能企及矣」とある。

(24) 張萱撰『疑耀』(叢書集成初編本、商務印書館、一九三九年)巻五を参照。また、その具体的な製法について、明・文震亨撰『長物志』(陳植校注・楊起伯校注『長物志校注』、江蘇科学出版社、一九八四年)巻五に、「法糊、用瓦盆盛水、以麵一斤滲水上、任其浮沉、夏五日、冬十日、以臭為度。後用清水蘸白芨半両、白礬三分、去滓和元浸麪打成、就鍋内打成團、另換水煮熟、去水、傾置一器、候冷、日換水浸、臨用以湯調開、忌用濃糊及敝帚」というような考証も窺える。

(25) 山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史―』(八木書店、二〇〇四年)第二章「古典籍が教える書誌学の話」を参照。

(26) 本書の写真は、京都大学電子図書館のホームページに公開されている。なお、八文字屋刊行浮世草子については、林望「八文字屋刊行浮世草子類書誌提要」(『斯道文庫論集』第十七号、一九八一年)を参照。ちなみに、「耳題」は、北宋本ではなく、南宋建陽本の大きな特徴の一つであると言われている。これについては、王治平「建陽書坊史話」(『建陽文史資料　第一輯』、福建省建陽県委員会文史資料編輯室編、一九八二年)を参照。但し、王氏も「耳題」は検索のために付けたのであるという通説に従っている。

附記：本稿は、日本学術振興会科学研究費(若手研究B「日本現存の旧鈔本『文選』に関する基礎的な研究」課題番号：24720166)及び国立歴史民俗博物館共同研究「高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究」(研究代表者：静永健)による研究成果の一部である。